

沈黙の色彩

076 大島商船高等専門学校 コンピュータ部

「次は、徳山、徳山です。」車内アナウンスが響き、私はふと窓の外に目を向けた。白い蒸気をまとう工場群が静かに並び、無言の働きぶりに心を奪われる。ドアが開くと改札を抜け、久々の都会の空気を感じた。不規則な建物、行き交う車、それでも整然としたリズムがあった。歩き出すと風車と山が現れ、私は長い階段を登っていく。風が頬を撫で、鳥の音が響く。頂上からの眺めは絶景だった。疲れは消え、空と海が溶け合う中で自分のちっぽけさが心地よかった。白く輝く周南大橋には大型トラックが行き交い、命を運んでいた。夕陽が橋を照らした瞬間、すべての色が消えた。赤も青も緑も、感情も失われ、白と黒だけが残った。私は静かにその世界へ歩き出した。